

2サムエル記3章 8-10 節 「自分のものを手放す時」

アウトライン

1A キリストについて聞く時

1B 軽蔑や反発

2B 従順

2A キリストの証拠を見る時

1B 感情的反応

2B 意志による決断

3A 自分の頼りにしているものがなくなる時

1B 葛藤

2B 弱さにある強さ

4A 自分のものを手放す時

1B 古いものの放棄

2B 自発的服従

本文

私たちの今朝の学びは、サムエル記第二3章 8 節から 10 節までになります。午後の礼拝では、1章から3章を学びたいと思います。

8 アブネルはイシュ・ボシェテのことばを聞くと、激しく怒って言った。「この私が、ユダの犬のかしらだとも言うのですか。今、私はあなたの父上サウルの家と、その兄弟と友人たちとに真実を尽くして、あなたをダビデの手に渡さないでいるのに、今、あなたは、あの女のことで私をとがめるのですか。9 主がダビデに誓われたとおりのことを、もし私が彼に果たせなかったなら、神がこのアブネルを幾重にも罰せられますように。10 サウルの家から王位を移し、ダビデの王座を、ダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に堅く立てるということを。」

私たちは前回、サムエル記第一を読み終わりました。サウルがペリシテ人との戦いの中で死にました。その後になくなったのかを、サムエル記第二は描き続けています。ダビデは、ヘブロンに移りました。そしてユダ族の人々が彼を王にしました。サウル家では、サウルの將軍であったアブネルが、サウルの子イシュ・ボシェテをマハナイムにおいてイスラエルの王としました。そのため、ダビデを王とするユダの国とイシュ・ボシェテを王とするイスラエルの国で戦いが始まりました。けれども、ダビデ家がますます強くなり、サウル家はますます弱くなりました(3:1)。

サウル家ではイシュ・ボシェテが王であったものの、実権はアブネルが握っていました。そして、

アブネルがサウルのそばめを自分のものにしていたと、イシュ・ボシエテが言いました。それで今、読んだことが起こったのです。アブネルは非常に怒りました。今の言葉いうならば「切れた」のです。彼はもう、サウル家を守っているのがこりこりだと思いました。あまりにも、ダビデが全イスラエルの王であること、それが神の行なわれたことは明らかだと言いました。それで、この発言の後に彼はダビデのところに行き、自分の配下にあるイスラエルをダビデに移行することを伝えました。

私たちはサムエル記を学んでいて、二つの国があったことを見てきました。一つは、人が立てた王の国です。イスラエルの民が、自分たちに王がほしいとサムエルに要求して、それで選ばれたのがサウルです。そしてもう一つは、神の選ばれた、神の任命された王の国です。それが、ダビデであります。けれども、すぐに王権がダビデからサウルに移行したのではなく、むしろ依然としてサウルが王であり、ダビデはサウルに追われる身となりました。けれども、徐々にダビデにつく人々が増え、全イスラエルに神がダビデに国を与えられたという認識が生まれ、そしてサウルが死んだ後は、イスラエルの長老たちでさえダビデを王としたほうが良いと思ったのです。

そして私たちは、ダビデは彼から出てくるキリストを表していることを学んでいます。キリストがユダヤ人に対して、またこの世界に対して王であるにも関わらず、この世は依然として人が支配しています。ダビデがサウルに対して手を出すことをしなかったと同じように、イエス様は初めにこの世に来られた時にご自分の権利と力を行使することはありませんでした。そしてダビデがサウルから迫害を受けたように、イエス様も受けられました。生まれた時、ヘロデ大王はベツレヘムにいる二歳以下の男の子をみな殺しました。そして主はいつでもどこでも、殺されるかもしれない圧力を受けておられ、神の定められた時に自ら十字架上で命をお捨てになったのです。

けれども、ダビデについての権威と力が徐々にイスラエル全体に広がっていったように、主が十字架につけられて三日後によみがえり、天に昇られ、そして弟子たちに聖霊が降り注がれてからは、力強くイエスの力が現れました。今や、世界中にこの方を主としてあがめている人々がいます。この方を信じている人もいれば、そうでない人もいます。けれども、終わりの日にはキリストは全世界の人々に現れ、ご自身が王の王、主の主であることを、力をもって現されるのです。

私たちの生活の中で、必ずこの方の権威と力に触れることがあります。普段は、自分自身の思惑や自分自身の知恵や力で物事を動かしているのですが、どこかで「これは違うのではないか？」という疑いが心に入ることはないでしょうか？自分は正しいと強く思っていて、それを主張して、その通りにやっているのだけれども、その正しさが果たして真実なものなのか、あるいは神から来たものか、心のどこかでは違うのではないかと思っているかもしれません。それは、人間から来た権威と力と知恵で物事を動かしているためであり、キリストの権威と力と知恵とずれがあるからに他なりません。

すでにクリスチャンの方は、生まれた時から持っている自分の力や知恵を、信仰を持った後も温

存している時に、それを「肉」と呼ばれています。けれども、私たち信仰者は肉に拠らず、己の知恵に頼らず、御霊に導かれて進まなければいけません。「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。(ガラテヤ 5:25)」それをいつ捨て去ることができるのか、肉と霊の違いが切り分けられて、キリストの御霊のみに拠り頼むことができるのが大切になります。

1A キリストについて聞く時

それでは、ダビデの生涯からキリストの權威に服するまでの過程を考えてみたいと思います。

1B 軽蔑や反発

ダビデがイスラエルの王として神が選ばれたことを、多くのイスラエル人は聞きました。その中で、その話を全く度外視して軽蔑していた人もいたし、反発していた人もいました。軽蔑していた人で典型的なのはナバルです。ダビデたちは、ナバルの羊の群れと羊飼いを守っていました。それで羊の毛の刈り入れの時にその報酬を求めて家来を送りました。けれどもナバルは、こう答えたのです。「ダビデとは、いったい何者だ。エッサイの子とは、いったい何者だ。このごろは、主人のところを脱走する奴隷が多くなっている。(1サムエル 25:10)」エッサイの子、というのは、身分が低く、貧しい家の出という蔑称になっています。そしてダビデのことを、サウルから脱走した奴隷としてなぞらえているのです。

イエス様も同じように蔑視の目を受けました。イエス様が故郷のナザレの会堂で教え始められた時に、聞いていた人々はこう答えました。「この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。(マルコ 5:2)」父のヨセフではなくマリヤの子であると呼んでいます。事実、イエス様は処女マリヤから生まれたので、ヨセフとのつながりはありません。けれども、そのことによってイエスが私生児なのではないかという疑いがありました。ヨハネ 8 章 41 節には、「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。」とイエス様をあてこずっています。このようにしてイエス様のことをこのような形で、うわべで裁き、軽蔑していたのです。

さらにイエス様は、ユダヤ人たちの怒りに対して真理をもって対処しておられた時には、「私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言うのは当然ではありませんか。(ヨハネ 8:48)」とユダヤ人たちは言いました。自分の真の姿をイエス様によって明らかにされると、その自分を守るためにとことんまでイエス様に攻撃的な言葉を吐くのです。

私たちがキリストを蹴落として見るときに、またキリストにある兄弟を見下し、うわべで裁くときに、私たちはこの過ちを犯しています。「兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。律法を定め、さばきを行なう方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばくあなたは、いった

い何者ですか。(ヤコブ 4:11-12)」

2B 従順

けれども、その反対の姿勢で応じた人々もいました。例えばナバルの妻アビガイルがそうでした。彼女は、ダビデがイスラエルの王になることを確信していました。「どうか、このはしためのそむきの罪をお赦してください。主は必ずご主人さまのために、長く続く家をお建てになるでしょう。ご主人さまは主の戦いを戦っておられるのですから、一生の間、わざわざはあなたに起こりません。(1サムエル 25:28)」ダビデが王となるのだから、ナバルに手を下して血を流したら、それが後で心の痛みとなり、つまずきとなると、極めて低姿勢でダビデにお願いしたのです。

同じように、ただイエス・キリストの噂を聞いただけで、この方に従順になった人々が聖書には数多く出てきます。自分の部下が病に伏した百人隊長は、イエスが癒しに行こうとされると、使いをやって「私の屋根の下にお入れする資格はありません。ただおことばだけください。そうすれば、直りますから。」と言いました(マタイ 8:5-9 参照)。収税人ザアカイも、背が低いのでいちじくの木によじのぼって、イエスを見ようとしてしました。盲人二人は、目が見えないのでイエスが通られていることをただ、耳で聞こえてくるので知り、「ダビデの子よ。あわれんでください。」と大声で叫びました。イエスの話だけ聞いて、そこに信仰を抱き、それで大胆に近づいたのです。

もし、私たちが自分の人生にこのような飢え渴きを持っているのであれば、信仰の従順によってイエス様に触れられることができます。キリストの権威に服することができ、神の国を体験することができるのです。

2A キリストの証拠を見る時

ダビデのことに戻りますが、ダビデは神に選ばれてイスラエルの王になったことが宣言されただけでなく、確かにそうであるという証拠を示していました。ダビデがペリシテ人と戦う時に、大勝利を収めていました。「主が彼とともにおられた。(1サムエル 18:14)」とあります。ダビデがイスラエルの王だという噂ではなく、事実、その徴を認めることができたのです。

これはイエス様の生涯には、あまりにも数多く現れています。この方が行なわれたことは、まさにこの方にこそ永遠のいのちがある、まことのいのちがあることを示すものでした。病人を直し、悪霊を追い出し、弱い者たちを弁護し、真実の言葉によって人々に希望を与えました。その憐れみと正義は、他に類を見ることはありませんでした。ですから、「わたしに命がある」と言われた時は、それが単なる言葉ではないことを、聞く人は誰もが知っていたのです。

イエス様は、中風病の人が連れて来られて、屋根から吊り降ろされたのをご覧になり、「あなたの罪は赦されました。」と宣言されました。それを聞いてパリサイ人が心の中で、「神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。」とつぶやきました。そこでイエス様がこう言われました。「中

風の人に、『あなたの罪は赦された。』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け。』と言うのと、どちらがやさしいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」こう言ってから、中風の人に、「あなたに言う。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい。」と言われた。(マルコ 2:9-11) イエス様は、「罪を赦す」権威があることを示すために、中風の者をその場で立ちあがらせたのです。

私たちは、キリストについて聞くという段階から、キリストについての証拠に触れるという段階に移ります。確かにキリストを信じていなければ、こんなことは起こりようがないという証拠に触れて、確かにこの方は生きているに違いない、と思うのです。

あるアメリカ人の牧師が、こんなことを証していました。脳神経外科の医者に招かれて、アンケート用紙に答えるように頼まれたそうです。そこには麻薬の数多くの名前が記載されていました。経験したことがあるものにチェック・マークを付けるのですが、すべてにチェックを付けて、かつもっと多くの麻薬を経験していました。その脳神経外科の先生に牧師は、「これを経験すれば、一生涯回復できない影響が残るんですか？」その先生は「その通りです。」と答えました。そしてその牧師さんは言いました。「私は、まともな生活を暮しています。こんなことは科学的にありうるのでしょうか？」そのお医者さんは、「まれにあるかもしれない。」と答えました。イエス・キリストが、この牧師さんを完全に直しておられたのです。

1B 感情的反応

私たちは、こうしたキリストの生きた証し、あるいはその真実に触れると二つの反応をします。一つは感情的な反応です。その話に感動するのです。けれども、その話を聞いてからしばらくするとその話を完全に忘れてしまったかのように、これまでと変わらない生活をします。

サウルがそのような人物でした。彼は、ダビデの真実な行ないに痛く感動しました。彼が洞窟にいて、ダビデが殺すことができたのに、それを敢えてしなかったのです。サムエル記第一 24 章 16 節から 21 節まで読んでみます。「ダビデがこのようにサウルに語り終えたとき、サウルは、「これはあなたの声なのか。わが子ダビデよ。」と言った。サウルは声をあげて泣いた。そしてダビデに言った。「あなたは私より正しい。あなたは私に良くしてくれたのに、私はあなたに悪いしうちをした。あなたが私に良いことをしていたことを、きょう、あなたは知らせてくれた。主が私をあなたの手へ渡されたのに、私を殺さなかったからだ。人が自分の敵を見つけたとき、無事にその敵を去らせるであろうか。あなたがきょう、私にしてくれた事の報いとして、主があなたに幸いを与えられるように。あなたが必ず王になり、あなたの手によってイスラエル王国が確立することを、私は今、確かに知った。さあ、主にかけて私に誓ってくれ。私のあとの私の子孫を断たず、私の名を私の父の家から根絶やしにしないことを。」」いかがでしょうか、サウルはこれで二度とダビデを追うことはしないと断ってしまいます。けれども、その後の話を読むと全く同じようにダビデを追っているのです。

2B 意志による決断

感情的な反応だけでは、不十分であります。そうではなく、はっきりと意志を用いて、自分が感じているのが、周りの状況が悪かろうが、この方にしたがうという決断が必要です。

ずっと後の話になりますが、ダビデが王となり、けれども自分の息子アブシャロムが王権を奪い取ろうとしました。それでダビデは王宮から出て、エルサレムから出ていきます。彼の家来はダビデにしたがっていきました。けれども、異邦人だけでもたった前日に亡命してダビデの家臣になることを誓った者たちが六百人いました。ダビデは、「あなたをわれわれといっしょにさまよわれるに忍びない。あなたはあなたの同胞を連れて戻りなさい。」と勧めました。けれども、その長イタイはこう答えたのです。「**主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(2サムエル 15:21)**」極めて条件が悪かったのに、それでもダビデに仕えることを心に強く決めていました。

多くの人が信仰のことで悩んでいます。「信じる」という言葉の定義で悩んでいるのです。信じているというのは心のどのような状態を指すのかが分からない、と言います。疑いが出るのあれば、本当に信じているとは言えないのではないか？信じていないのと変わらない感情が出てくれば、それは本当に信じていないのか？けれども、そこで感情が信仰なのではない、という区別ができれば自由にされます。自分の感情ではそうではないと思っても、それとは別に、「それでも、私はこれこれを信じます。」という意志を示めしているか？ということであります。感情イコール信仰ではないのです。

3A 自分の頼りにしているものがなくなる時

このようにして、ダビデが神に選ばれた王であること、また確かに王であることの証拠を知った時に、さらにダビデに与えられた神の主権に服さなければいけない大きなきっかけが与えられます。それがサウルの死です。これまでは、サウルがイスラエルの王であったから、その王権の下にいれば何の問題もありませんでした。けれども、サウルがいなくなった今、どうすればよいのか？アブネルはそこで、サウルの子イシュ・ボシェテを王に立てたのです。苦肉の策でした。彼にはすでに権威がありません。だから自分自身でその王を守るべく苦心するしかなかったのです。

1B 葛藤

けれども、心の葛藤は深まるばかりです。ダビデの家のほうがサウル家よりも力があるのです。その葛藤の中でアブネルは生きていました。

キリストの自分の身を服するまでには、キリストの事について聞く、そしてキリストが生きておられることを自分自身が触れるという段階を経て、今度は、自分が支えにしているものが実は脆いものではないのか？という疑いが出てくる時があります。これまで支えにしてきた人がいなくなった。これまで当たり前だと思っていた事柄が実はそうではなかった、という経験をします。

例えば、私の両親は、母方の祖母が亡くなって仏式の葬儀に参加した時に、予約した新幹線の時間が迫っていたので、お骨を拾わないで途中退席しなければいけませんでした。そこで後で親戚から非難されたそうです。母は葛藤しました。これまでの親戚付き合いは一体何だったのか？そして自分の母のことではなく、自分たちのことしか考えていない吊いって、一体何なんだろう？多くの人が信仰を持ってない理由として、親戚付き合いや、先祖の墓を取り上げますが、それがいかに自分を支えるには脆すぎるのが後になって分かるのではないのでしょうか？それで葛藤を覚えるのです。

2B 弱さにある強さ

けれども、アブネルは戦い続けました。同じように、心に葛藤があるのに戦い続ける人たちがいます。最も偉大な伝道者また宣教者となったパウロがそのような人でした。彼は、片っ端からキリスト者を捕縛し、キリスト教会を迫害しました。そこで復活のイエスがパウロに現れるのです。「**とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。(使徒 26:14)**」パウロはキリスト者を迫害したのは、キリスト者の信仰に真実があることを既に知っていたからです。けれども、古いものを捨てることができませんでした。それでその真実に対して、戦いを挑んでいたのです。

パウロはイエス様に出会った時に、三日間、目が見えなくなりました。弱くなりました。同じように、神に真実に出会った人々は、弱められる人が数多くいます。ダニエル書には、全世界を治めていたバビロンの王ネブカデネザルが、獣のようになって草を食べるようにされ、彼はその後で理性が戻り、天の神をほめたたえるようになりました。弱くされたことによって神に出会ったのです。

パウロが言ったように、「私たちは弱い時に強い。」のであります。「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。(2コリント 12:9-10)」私たちの弱さに、キリストの力が完全に働きます。私たちは弱くされた時にこそ、強いのです。ある人は言いました。「クリスチャンはおくびょうなんかじゃない。むしろ勇気ある人々だ。自分が事実通り弱い存在であることを認めるというのは、相当な勇気を要する。それをやり遂げた人々なのだ。」ということです。

4A 自分のものを手放す時

そして最後にしなければいけないことがあります。それは、「自分のものを手放す」ことです。アブネルが自分のものを手放すことのできたきっかけは、イシュ・ボシエテが自分のそばめについて文句を言ったことです。たわいもないことでしょうが、けれども、それがきっかけとなり、これまで分かりに分かり切っていた、ダビデの王権を心から受け入れるに至りました。行動に移したのです。

1B 古いものの放棄

したがって、私たちが具体的に自分で古いものを手放すという決断と行動が必要です。頭では分かっている、実はもうすでに頭の中では捨ててしまっていると思い込んでいるけれども、実際はそれを行っていないことがないでしょうか？

古いものにしがみついていることの、しばしば引用される例え話がありますが、ある原住民が猿を捕まえる方法です。中身をすべて取り出したココナツの実にお米を入れます。けれどもその穴は、猿が手を入れることはできても、げんこつのままでは手を取り出せない程度にします。猿が手を入れました。お米を取り出そうとしてもできません。その猿がやれば良いことは、ただ米を手放すことだけです。けれども、意固地になってそれをしません。とうとう、捕まえに来る人間がやって来ました。ついに猿は捕まえられます。猿はその米のために、自分自身の命を失ってしまったのです。

私たちは、このように古いものへの執着が極めて強いです。ですから、アブネルのように、「この古いものはもうこりごりだ。これは手放したほうがよい。」と決めることが必要です。実にキリスト者としての生き方は、新しさであります。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント 5:17)」すべてが新しくされたこと、そして古いものは過ぎ去ったことを認めるのです。

2B 自発的服従

そして最後に、アブネルは自発的にダビデのところに行きました。そして全イスラエルを引き渡すことを申し出ました。ダビデが強いらせたのではなく、彼の方からダビデのところに来たのです。キリストも同じです。キリストの力と権威は、決して強制されるものではありません。この方の下に服従することは、自らの意志を十分に用いて行うことです。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)」わたしのところに来なさい、という命令は、呼びかけであり、押しつけではありません。招かれているのであり、強いられているではありません。そして自ら進んで出て行って、イエスから来る安らぎと癒しを受けるのです。

皆さんは今、どの段階におられるでしょうか？まだキリストに服していない自分自身がいるのでしょうか？それと葛藤を覚えているのでしょうか？それとも、いつまでも感情的な反応だけで、自分自身は変えていない生活を送って来たのでしょうか？どの段階にいても、すぐに、今読んだイエス様の言葉の約束を手に入れることができます。イエスのところに来て休むことができます。どうか自分のすべてを明け渡してください。そしてダビデの国が統一して平和が始まるように、皆さんの心と生活に平和が訪れます。